台大日本語文研究第 47 期
2024 年 06 月，頁 21-39
2024-04-12 收稿，2024-05-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202406_(47).0002

浮世草子中所描繪的旅行考察
—以《好色一代男》為中心—

高永爛*

摘要

本研究旨在透過分析《好色一代男》中所描繪的旅行面貌及其意義，闡明該作品的主題與旅行在文本的可能性。研究結果顯示，作者西鶴刻意安排《好色一代男》的主角世之介在前四卷中到各地旅行，其意圖可以理解如下。

首先，透過世之介的旅行，顯現出大都市以外的地方經濟狀況惡劣。通過旅行，可以描繪出地方上普遍存在男女皆從事賣春行業之現實，從而披露、凸顯與大都市對比的地方現實風貌。其次，藉由對地方風景和風俗的描寫，介紹了多種不同的生計方式。此外，除了這些公開於世的生計之外，還能如實地展現地方上人民利用性愛的方式作為生計的樣貌。

因此，本論文結論提出《好色一代男》所描繪的旅行是為了反映與大都市對比的地方現實風貌所設之觀點。

關鍵詞：浮世草子、旅行、好色一代男、經濟狀況、生活

臺大學術期刊資料庫

* 全北大學日本學科副教授

A Short Study on Trip Describing in *Ukiyozoushi*

Youngran, Koh*

Abstract

The purpose of this research is to clarify the theme of the work and the probability of the trip through the aspects and significance of the travel depicted in *Koushoku Ichidai Otoko*. As a result of my research, I was able to understand Saikaku's intention in having Yonosuke travel up to the fourth volume of *Koushoku Ichidai Otoko* as follows.

First, Yonosuke's travels brought to light the poor economic conditions of rural areas outside of major cities. Through his travels, he was able to depict the reality of rural areas where both men and women turn to prostitution, and it seems that he was able to bring to light a three-dimensional reality that contrasts with that of big cities. Second, the depiction of local landscapes and customs made it possible to introduce a variety of livelihoods.

Furthermore, apart from these obvious livelihoods, we were able to vividly see how people in rural areas utilize sexual love. Therefore, it can be concluded that the trip depicted in *Koushoku Ichidai Otoko* was able to reflect local people and reality in contrast to large cities.

Key words: *Ukiyozoushu*, trip, *Koushoku Ichidai Otoko*, Economic situation, Life

臺大學術期刊資料庫

* Associate Professor, Japanese Studies College of Liberal Arts, Jeonbuk National University

浮世草子に描かれた旅行小考
—『好色一代男』を中心に—

高永爛*

要旨

本研究は『好色一代男』に描かれた旅行の様相と意義を通して、作品の主題と旅行の蓋然性を明らかにするところに目的を置いたものである。研究の結果、『好色一代男』の4巻までにて、敢えて世之介を旅行させる西鶴の意図が次のように理解出来た。

まず、世之介の旅行を通じて京や大坂のような大都市以外の地方の劣悪な経済状況が浮かび上がった。作品には世之介が旅行を通じて出会う地方の男女が売春に走る現実が描かれ、大都市とは対照的な地方の現実が立体的に浮かび上がることが出来たと見受けられた。次に、地方の風景や風習の描写により、多様な生業の紹介が可能であったことも作中に旅行を設定した効果であった。そして、表立った生業とは関係なく地方の人々が性愛を利用する姿も如実に映し出されていた。

したがって、『好色一代男』に描かれた旅行は、大都市と対比される地方の人々と彼らの現実を反映するための設定であったと結論づけられる。

キーワード：浮世草子、旅行、好色一代男、経済状況、暮らし

臺大學術期刊資料庫

* 全北大学校日本学科准教授

浮世草子に描かれた旅行小考
—『好色一代男』を中心に—

高永爛

一、はじめに

江戸時代（1603-1868）の日本において、許可を得ていない旅行は原則的に禁じられていた。ただし、町人は商業的、宗教的理由があれば他地域への移動が可能であった[1]。また、江戸初期の農村では富かな有力者が宗教活動を通して地域支配を強化して行き、伊勢参りのような長距離の旅行も宗教活動の一環として正当化されていった[2]。しかし、これは例外的な場合であり、当時の人々が通常、家を離れることは容易ではなかった。この容易ではない旅行を何度も繰り返した町人が江戸時代の浮世草子『好色一代男』（1682）に描かれている。

主人公世之介は、商業的、もしくは宗教的理由にかこつけて、何度も他地域へ移動している。しかし、その旅行の背景には、特別な真の理由があった。世之介は 17 歳になった時、商売を習いに現在の奈良県にあたる春日の里に行くことになる。これを機に、近辺はもちろん、江戸、信濃など遠くへと遍歴するのであった。その過程を一見すると、一種の旅行と言える場合もあれば、生業のために仕方

---

1 笛吹明生（2009）『江戸とんでも法律集』、東京、中央公論新社、pp.194-196.「関所破りは死罪、磔、獄門が待っている。（中略）芸人は、関所で芸を披露すれば手形は要らないというのは、あくまでも慣例である。また、手形はひとつの関所につき一枚必要で、しかも有効期限は発効日の翌月末まで。諸国をめぐる商人や巡礼は『往来切手』というものが発行された。その往来切手を偽造した例がある。延宝四年（1676）二月、比丘尼の妙心が往来切手に似せた手形を持って、子供尋ね歩いていたが、江戸に送られて獄門になった。」

2 朴ジンハン（2006）「江戸時代上層農民の余暇と旅行」『歴史学報』第 189 輯、ソウル、歴史学会、p.237.「江戸時代には寺社の宗教祭礼が庶民の娯楽行事と密接に関連を有していたためである。庶民の娯楽及び余暇活動は宗教祭礼という外皮を通じて奢侈禁止を明文化した幕藩の統制と監視から逃れると同時に、娯楽や遊びを否定的なものとして評価していた当時の支配的な価値観から最小限の同意を導くことができた。」（著者名等韓国語はすべて筆者の翻訳による。）

なく地方を転々とする場合もある。このため、『好色一代男』は総8巻のうち、4巻までが所謂地方の遍歴譚として分析され[3]、作中描かれた各地域の文化や状況の正確さも既存の研究で明らかにされている[4]。さらに、『好色一代男』を好色物ではなく、一種の貴種流離譚として見る視点もある[5]。

このような『好色一代男』の主題に関して、作家西鶴は現実の悲哀の痕跡を消し去り粋の世界を賛美しようとしつつも、現実認識を反映せざるを得なかったことが先行研究により明らかにされている[6]。また、遊郭での資本の重要性を目の当たりにするしかない当代の人間群像の悲哀が描かれている点も解明されている[7]。しかし、管見の限り、世之介を旅行させる作者の意図を詳細に究明した研究はまだ見当たらない。さらに、各地域の文化や状況は何のために描かれているのかに関する考察もまだ行われていない。したがって、本

---

3 浅野晃（1995）「初期西鶴の世界―逃亡・放浪の構想と転変たる運命の主題」『西鶴への招待』、東京、岩波書店、p.72.「巻四までが、世之介という小説的な架空の主人公をつくりあげて、その諸国遍歴の話となります。」

4 上同書、p.83.「この『一代男』に書かれている部分を、児玉先生の本とつき合わせてみると、じつに正確に書いてあることに気づきます。追分宿の実態についていい加減なことを書いてはないのです。」

5 森田雅也（2006）『西鶴浮世草子の展開』、大阪、和泉書院、p.58.「そして、そのような読みによって、『好色一代男』の世界は単なる浮世草子の好色物ではなく、貴種流離の好色遍歴譚として、正当な伝統性を帯びた味わい深い作品として受容されていくのである。その上で、『伊勢物語』の「むかし男」も、世之介をして、今業平として甦るのである。」

6 西島孜哉（1989）『西鶴と浮世草子』、東京、pp.20-21.「西鶴の『さる太夫』や吉野・夕霧の造型にみられた創作意識は、世之介を主人公として活躍させる巻一から巻四までにおいても同様にみられる。（中略）世之介の行動には、現実の匂いが希薄なのである。西鶴はそのような世之介像を造型しながら、『分別所なり』と現実意識を表明せざるを得なかった。遊里の手管もその意味では、現実面から世之介の行動を規制するものとなる。西鶴は常に現実に引きづられる人心を強く認識しながら、それを捨象して『一代男』の世界を構築しようとしていた。しかし、その現実に支配される人心への認識は、さまざまな型で創作意図をこえて、作品世界に顔を出していることが知られている。」

7 白倉一由（1994）『西鶴文芸の研究』、東京、明治書院、pp.18-20.「西鶴は『一代男』において、人間の本質を問題にしている。人間は同時に理想を夢見るが現実中心的でエゴイズムの存在であり、複雑・怪奇の発想をする。（中略）『好色一代男』を書き進む過程において絶えずこの精神的な相克があったものと思う。西鶴は現実を肯定的に書く粋の精神に一貫させようとした。しかし心の背後にはいかんともしがたいわだかまりがあった。現実の遊里の実態である金銀の重大さ、重要さであり、それに揺り動かされる人間のエゴイズムであった。」

研究は『好色一代男』に描かれた旅行の様相と意義を分析し、作品の主題と旅行の蓋然性を明らかにするところに目的を置きたい。

二、『好色一代男』の旅程

日本古典文学にて旅行を素材にした文学の歴史は、紀行文を経て近世に至り名所記、評判記へと受け継がれる。殊に遊女評判記の影響を受けた『好色一代男』に自ずと旅行が利用されることを分析した鋭い知見もある[8]。ただし、周知の通り、『好色一代男』に先んじて仮名草子の『竹斎』(1621) こそ、主人公の藪医者竹斎が下僕と江戸に下る旅の物語として有名である。作中には、江戸までの旅路において出会った多様な人々の生活や風習が滑稽に描かれつつ、当時の社会の様相を反映していると言える。さらに、『好色一代男』に後続する浮世草子の中にも、『好色旅日記』(1687) のように、旅行自体を名所記の形で綴る作品もある[9]。しかし、『好色一代男』の 4 巻までの各旅程は、それぞれ旅立つ理由や事件があり、単に名所を紹介するための名所記とは程遠い。したがって、『好色一代男』の 4 巻までの旅程を詳細に分析することにより、西鶴が作中に旅行を設定した意図が理解でき得ると見受けられるので、以下の表で世之介が旅行する理由と旅先にての活動内容を確認してみる必要がある[10]。

---

8 檜谷昭彦 (2000)「名所記・評判記と浮世草子―好色旅日記をめぐって―」『浮世草子研究資料叢書第五巻　研究編 1　雑誌論文・講座論文』、東京、株式会社クレス出版、pp.304-305.「日本文学はその古典的遺産の一つとして、紀行文学の系譜を有している。いわゆる道の記である。土佐日記、更科日記、十六夜日記、海道紀行と、その路次の見聞感慨を叙しながら、(中略) 道の記から名所記へ、これは中世から近世への時代の推移と並行する。(中略) 評判記は名所記から派生したものであったろうし、遊里遊女の細見や野郎評判を叙した形の作品は、あくまでも都市のいわゆる知識人層の間から生れたものであろうと考えられる。(中略) そうして天和二年、浮世草子の嚆矢として『好色一代男』は出版される。」

9 上掲論文「名所記・評判記と浮世草子―好色旅日記をめぐって―」、p.311.「そこに父親から内証勘当を受けた賀州の源という男が、江戸の新見世を売払った金で、遊女の真葛を請出して愛の巣を営む所である。辛く住み憂き浮世を渡り切れぬ人々の侘しい生活のありさまである。この源が女房を連れて伊勢参宮を思い立つ。旅立ちの描写に続いて叙述の形式が一変する。(中略) 叙述は全く名所記形式である。」

10 途中移動がなかった場合は旅行とみなさず、研究の対象としないことにする。

番号	巻章(歳)	旅行の経路	旅行の理由	活動内容
1	1巻6章(12)	京都-須磨、兵庫	満月を見に船を出す。	漁村須磨の海女と兵庫の遊女の軽薄さに対する不満を描く。
2	2巻1章(14)	京都-大和の初瀬の寺	参拝。	男色の人々が仁王党に隠れている。そのうちの一人と男色と楽しむ飛子達の現実を聞く。
3	2巻4章(17)	京都-大和の春日の里	春日の取引先に勘定の術を学びに行く。	木辻町の遊郭で昔の知人である大坂の遊女近江と邂逅。地方の人々の経済的苦労に共感した世之介、近江との愛を誓う。
4	2巻5章(18)	京都-鈴鹿の大竹屋-御油・赤坂-駿河江尻-芋川	江戸の支店に年末決算の調査。	浜辺にて妖艶な姉妹若狭・若松に出会う。二人に没頭した世之介は二人を連れて京都に向かう。旅費がない世之介一行は芋川で名物のうどんを売り生計を立てる。しかし、姉妹は三河花園山に捨てられ出家、本格的な旅行の始まり。
5	2巻6章(19)	芋川-江戸谷中	江戸へお使いに行く。	江戸にていろんな下級の売春婦や遊女に没頭し勘当される。香具売の難色を楽しむ。

臺大學術期刊資料庫

6	2巻7章（20）	江戸-奈良	故郷に向かう世之介	故郷に帰れず、同行の僧侶の男色の相手になり、引き続き性愛に溺れる日々が続く。奈良近くで貧困な日々続く。
7	3巻2章（22）	奈良-鵜殿野（うどの）-備後の鞆（とも）-下関稲成町	知人に誘われて下ってゆく。	経済的に零落したのちにも多様な性愛に溺れ南の方に下って行く。
8	3巻3章（23）	中津-稲成町-上方-大坂	知人に誘われて下ってゆく。	大坂にて下級の売春婦である蓮女達と性愛に溺れる。
9	3巻5章（25）	大坂-佐渡	金銀の鉱山に富を求める。	飽きもせず性愛を楽しむ世之介。出雲崎という島に行く途中にも性愛のための女性を求める。
10	3巻6章（26）	佐渡-酒田	魚売りになって移動する。	屈指の港である坂田の商人達が集まる中、彼らを目当てにする下級の売春婦、または生計のために、売春婦になるしか術のない漁村の妻たち。
11	3巻7章（27）	酒田-鹿島明神-水戸-福島本宮	神託を伝える巫女が遍歴する中、売春を通して、	巫女の一人と深い仲になり、供に神宮に行き世之介も神託を伝える仕事に就く。水戸から本宮に入り、やはり性愛に溺れて

臺大學術期刊資料庫

			貧困をしのいでいる事実を知った。	いたが、夫のいる舞子と戯れ、その夫に見つかり頭を剃られて追い出される。
12	4巻1章（28）	本宮-信濃	信濃に入る。	田舎の女性の野暮ったさが描かれる。遊女のように着飾った田舎の女性たちとも絶えず関係を持つ。いよいよ、盗賊として疑われ監獄に入り、夫を嫌がり逃げ出し投獄された隣の部屋の女性と心を通わす。
13	4巻2章（29）	信濃-信濃	女性と赦免され一緒に逃れる。	女性は追っ手につかまり死ぬ。死んだ女性の死体を掘り起こし、遊女たちの誓いの爪、髪の毛のようにして売ろうした者を捕まえる。
14	4巻3章（30）	信濃-最上の寒河江	落胆したまま衆道の縁のあった男を訪ねてゆく。	眠りつく刹那、昔、縁のあった女性達の幽霊を見ては過去を反省する。
15	4巻4章（31）	山形-江戸	知人のお世話になっている。	大邸宅の奉公人であった女性が世之介を誘惑し、枕を共にする。女性の性欲描写。

臺大學術期刊資料庫

16	4 巻 5 章（32）	江戸-京都	無産を京都へ案内する。	江戸の富豪夢山と京都に行き、遊郭にて遊ぶ。密会を楽しむ身分の高い女性達。
17	4 巻 6 章（33）	京都島原	遊興の場、夢山と善吉の小間使い役の世之介。	善吉は美しい遊女を誘惑する一方で、零落した世之介は下級の遊女にも拒まれ、心機一転させたい世之介。
18	4 巻 7 章（34）	京都-泉州佐野・嘉祥寺・加太-紀州-堺	過去には女性に溺れていたが出家した僧侶を訪ね紀州に行く。	途中泉州佐野・嘉祥寺・加太に到着。漁村で夫不在中に売春する妻達を描写。ここで、多くの女性達と関係を持ち恨まれる。この女性達と舟遊びの途中難破、九死一生。 堺の家に戻り、父の死去、遺産相続。

上の表から分かるように、世之介は遺産相続による経済的安定に至る 4 巻 7 章まで、総 18 話にて多様な旅行を経験する。殊に、地方を旅行する途中投獄された 4 巻 1 章から夢山の小間使いに零落した 4 巻 6 章までの 6 話以外は皆、劣悪な経済状況におかれた地方を旅行している。そして、世之介は劣悪な経済状況の中で生きる女性、または男性との性愛に没頭するのである。したがって、『好色一代男』の 1 巻 6 章から 4 巻 7 章までの総 18 話の中 2/3 の 12 の逸話には、世之介の病的な性愛執着症に応じるしかない地方の人々の姿が描かれていたと言っても過言ではないだろう。その詳細を次の章で確認してみる。

臺大學術期刊資料庫

三、地方の劣悪な経済状況と売春描写

前で確認したように『好色一代男』の4巻まで、世之介は生まれ育った京都の近辺、さらには北東、北西、西南の順であらゆる所を旅行している。その所々の風景と風習が描かれる一方で、劣悪な経済状況をも描かれ、その中には売春婦、もしくは売春夫の生々しい生き様が描かれている。

まず、世之介 12 歳の時に初めて出会った劣悪な経済状況下で生きる売春婦達の描写を以下で確認してみよう。

> 海すこし見わたす浜庇に舎りて、京よりもたせたる舞鶴・花橘の樽の口をきりて、宵の程はなぐさむ業も、次第に月さへ物すごく、一羽の声はつまなし鳥かとなを淋しく、「一夜も只はくらし難し。若ひ蜑（あま）人はないか」と、有ものにまかせてみるに、髪に指櫛もなく、顔には何塗事もしらず、袖ちいさく、裾みぢかく、わけもなふ磯くさく、ここちよからざりしを、延齢丹などにて胸おさえ、（中略）又の日は兵庫迄来て、遊女の有様、昼夜のわかちありて、半夜とせわしくかぎり定めるは、（中略）どこやらひえたるすねを人にもたせ、「たくよ、くむよ」と、寝言まじりに、いかに事欠かなればとて、いつの程より、かく物毎をさもしくなしぬ。（1 巻 6 章。以下、傍線は筆者による。）[11]

傍線部のように、漁村須磨の海女、兵庫の遊女は全く世之介の気に入らない。優雅とはとても言えそうにないこの女性達の野暮ったい外見と接客態度に、世之介は「ここちよからざりしを、延齢丹などにて胸おさえ」、「いかに事欠かなればとて、いつの程より」と絶望しているようにも見受けられる。海女は「磯くさく」、遊女は「寝言」まで言っているほど疲れ果てた日常の中、彼女たちは春を売

[11] 麻生磯次・冨士昭雄訳注釈（1974）『対訳西鶴全集一　好色一代男』、東京、明治書院、pp.27-28. 以下、テキストとする。

嘉大學術期刊資料庫

っているとは言え、世之介が求めている所謂「粋」とはかけ離れた状況に置かれているのである。ここでは、女性との優雅な駆け引きや微妙な心理のすれ違いなどあるはずもない。薬で胸をおさえなければならないほどの磯臭い海女や生活感あふれる兵庫の遊女との性愛描写は失笑を禁じ得ないものである。しかし、一方で世之介と夜を共にせざるを得ない地方の売春婦達が置かれた劣悪な経済状況を振り返ると、そう容易に笑える場面でもないのである。

世之介は、須磨の海女や兵庫の遊女達と類似した人生を歩んでいる悲惨な売春夫達にも出会うのであるが、その詳細を以下に示す。

> 今こそ今とおもはるる脇あけの、下人に風情をつくらるるもあり。髪結ふけしき常ならず、紙ひぼの編笠の様子、「懸る所には」と、尋ねられけるに、「此里は仁王党と申て、京・大坂の飛子、しのび宿なる」と、（中略）いづく定ず、すみよし安立町に隠れ家、又は河内の柏原、此里にきて、今井・多武峰の出家をたらし侍る。或時は、片山陰の柴かりて、適々手にふれし銀子をしてやり、浦人の塩馴衣をはだかにして、仮にも取る分別計。情なきは、衆道ごころになりまして」と語る。（2 巻 1 章、 テキスト pp.39-40.）

上の売春夫達は劣悪な経済状況のために定住できず、売春の仕事が入り次第引き受け、生業を立てていた。粋を求め、衆道の義理を立てている場合ではないのに、世之介に出会って現実離れしてしまう地方の売春夫の切ない心情が傍線部に表われていると言える。

いよいよ 17 歳になった世之介は両親の名義で商売を習いに奈良の春日町の店に奉公に出る。しかし、また遊郭のある木辻町に戻り、昔の知人である遊女近江と邂逅する。彼女のいる遊郭の風習は非常に荒く、とても優雅で粋な遊郭とは言えない。その詳細を以下で紹介する。

臺大學術期刊資料庫

商売の道をしらではと、春日の里に、秤目しるしよししして、三条通の問丸に着て、けふは若草山のしげりを詠め、暮てはひかりあるむしの飛火野、いま幾日過て京にかへるも惜しまれ、（中略）所ならいとて禿もなく、女郎の手づから燗鍋の取まはし、見付ぬうちは笑しく、「床にいれ」などと申て、あしらひ男先立て、（中略）此かるさ、下り舟にのる心知して、「一夜の事なれば足のさはるも互に御免」と、枕も定めず。（2 巻 4 章、テキスト　p.53.）

傍線部のように、地方の遊郭の荒々しく下品なもてなし、さらには「此かるさ」は「下り船にのる心知」だと描かれている。これは地方経済の劣悪な状況とそれに伴う風習や暮らしの粗悪さを見せつけるものであり、大都市の人々や遊女とはかけ離れた暮らしぶりがその背景になっていると言えよう。

一方、勘当されても絶えず性愛に溺れる世之介は大坂へと向かった。

かり衣、しらぬ道すぢを尋て、中津といふ所を過て、いかなる方に舎るべきたよりなく、（中略）けふ大坂のうき世少路に、我が事忘れぬ人ありと尋行に、（中略）「あれは問屋方にはすはと申て、眉目大形なるを、東国西国の客の寝所さすため抱て、おのがこころまかせの男ぐるひ、（3 巻 3 章、テキスト pp.85-86.）

上の女性達は表向きは問屋にて働いているが、裏ではこっそり売春をしている下層民のはすは女である。この逸話は、彼女達の経済的不安定性を前提に展開されている。ここで世之介は魚売りに零落し、以降、北方の漁村にまで落ち、そこでも多様な売春婦に出会うのであるが、その様子は以下のようである。

臺大學術期刊資料庫

魚売となって、北国の山々を過ごし、今男盛二十六の春、坂田といふ所にはじめてつきぬ。此浦のけしき、桜は浪にうつり、誠に「花の上漕ぐ蜑の釣舟」と読しは此所ぞと、（中略）小娘は親のため、又は我男を引連、我子を母親にだかせ、姉は妹を先に立、伯父姪姨のわかちもなく、死なれぬ命の難面（つれな）くて、さりとは悲しくあさましき事共、（3 巻 6 章、テキスト pp.99-102.）

傍線部のように、この町の女性達は両親や夫、さらに親戚のためにも売春で以って生計を立てている。それこそ、「死なれぬ命の難面くて」の状況である。このように、劣悪な経済状況に置かれた地方の売春婦、または売春夫は、世之介が旅行することによって偶然出会う人々であり、世之介が旅行をしていなければ知り得なかった当時の地方の現実だと言えよう。もちろん『好色一代男』には、旅先の風景や風習も描かれたりする。しかし、風景や風習の描写は実写そのものに重点が置かれているのではなく、究極的には性愛や生業に関連した逸話へと転換、拡張するためのものとなっている。この点、以下で確認してみたい。

四、地方の風景・風習と性愛

『好色一代男』は周知の通り、『源氏物語』を追随した作品である。『源氏物語』にて「須磨」という地域が象徴するものは、わび住まい、転機というものであろう。したがって、12 歳の世之介が敢えて「須磨」へ行ってから旅行や遍歴が始まるという設定は、決して偶然ではないと言える。そして、雅な風趣を捨てきれない世之介が京の銘酒「舞鶴・花橘」を持参して「須磨」に行ったという点にも注目すべきである。

京よりもたせる舞鶴・花橘の樽の口をきりて、宵の程はなぐさむ業も、次第に月さへ物すごく、一羽の声はつまなし鳥かとなを

臺大學術期刊資料庫

淋しく、「一夜も只はくらし難し。若ひ蜑（あま）人はないか」と、（1巻6章、テキスト　p.27）

上記のように、銘酒「舞鶴・花橘」を楽しむ雅な暮らしをしていた世之介が「須磨」という空間に置かれることによって、地方の鄙な風景や風習はより対照的に映る。そして、傍線部「一羽の声はつまなし鳥かとなを淋しく」のように、いよいよその淋しさから須磨にて女性を求める世之介が描かれる。さらに、この「須磨」への旅行以降、世之介の旅する地方の風景や風習は世之介が自ずと性愛を求めずにはいられないものであり、逆説的にそれぞれの風景や風習あっての世之介の性愛執着症だったのである。

桜井の里をすぎ、十市・布留の神やしろを、北に詠こして、暮におよべば、椋橋山の麓に、かすかなる草の屋に、折しも麥も秋のなかば、から竿の音のみ。里の童部、ねぢ籠、あまがへるの家などして、（中略）よこ嶋のもめん蒲団にせんだんの丸木引切枕、夏をのがれたる蚊もあればとて、摺鉢にすり糠を煙らせける。煙と思へば是も伽羅のここちして、（2巻1章、テキスト　pp. 40-41.）

引用文の大和の椋橋山の麓の風景から、ここはいかにものんびりとした田舎であることが分かる。ここで出会った売春夫、所謂飛子(旅稼ぎの男色の若衆)は、「摺鉢にすり糠を煙らせ」るのであるが、これが「伽羅」のように思われ、世之介の意識は自ずと性愛へと繋がるのである。蚊を退治するためのこの地域での飛子の風習であるにもかかわらず、世之介には性愛へのきっかけとなるのが当地のや風習「摺鉢にすり糠を煙らせ」ることなのである。同様の事は、2巻4章でも確認できる。

臺大學術期刊資料庫

其比は卯月十二日、十三鐘のむかしをきくに、哀れ今も鹿殺せし人は其科を赦さず、大がきをまはすとかや。人のおそるるをわきまえて、山は山、野は又さらに、町にかけりて、おのがさまざま妻なるるも笑（おか）しくて、（2 巻 4 章、テキスト　p.53）

奈良に放たれた鹿の交尾の風景を描いた引用文から、世之介の性愛の逸話が展開するだろうことは想像に難くない。引き続き、地方の風景や風習が世之介の性愛、もしくはそれと関連深い生業描写に繋がっていく場合を以下で紹介したい。

交野（かたの）・枚方（ひらかた）・葛葉（くずは）にさし懸り、橋本に泊まれば、大和の猿引、西のみやの戎まはし、日ぐらしの歌念仏、かやうの類の宿とて、同じ穴の狐川、身は様々に化るぞかし。此所も売子・浮世比丘尼のあつまり、（3 巻 1 章、テキスト p.76）

都の近辺である地域の風景を描く上の引用文は、それこそ日雇い職のような様々な生業を並べている。そして、これらの生業は決して安定的な経済状況を作り出せるものでなく、「身は様々に化る」ので、世之介はこの地方における所謂化けた売春婦たちとも関係を持つ。さらに、「なを尋ねければ、いづれにても肴をかへば、草履をぬぎて奥座敷にもあがるとかや。浦風のかよひて汐ふくみし脚布（きゃふ）も、折節は興あり。」（3 巻 1 章、テキスト p.82.）と、魚一つ買っても枕を共に出来るこの地方の風習が世之介を性愛へと導くのである。

今度は世之介が魚売りと零落し、日本屈指の漁港に着く。しかし、その美しい景色とは対照的な女性たちの風習が以下のように描かれている。

臺大學術期刊資料庫

魚売となって、北国の山々を過ごし、今男盛り二十六の春、坂田といふところにはじめてきぬ。此浦のけしき、櫻は波にうつり、誠に「花の上漕ぐ海人の釣船」と読みしは此所ぞと、（中略）上方のはすは女とおぼしき者、十四五人も居間に見えわたりて、其有様お笑しなげに、（中略）是皆問屋の召使の女にはあらず、銘々に宿を持て有ながら、旅人を見懸てあつまるよし。是をおもふに、此徒、津の国有馬の湯女に替る所なし。（3 巻 6 章、テキスト pp. 99-101.）

傍線部に表われたこの地方の美しい自然と女性達の浅ましい風習は対照的であり、お金のために売春を厭わないこの地方の風習が自ずと世之介を性愛へと導くように見受けられる。3 巻 7 章に描かれる鹿島明神にての巫女[12]、さらに 36 文の籾引きの手当さえ稼いでくれば何をしても許される水戸門町の奉公女[13]、4 巻 1 章の垢抜けさせた山家者の偽遊女[14]など、『好色一代男』に描かれる各地方の風景や風習は世之介を自ずと性愛に溺れさせていた。そして、『好色一代男』の各地方の風景や風習描写は、彼女、もしくは彼の表立った生業とは関係なく、誰しもが売春を生業とかけもつことのできる現実を如実に映し出していたと言えよう。

五、おわりに

この研究は『好色一代男』の 4 巻まで描かれた世之介の旅行が何を描き、何のために描かれたのかを問うものであった。本研究の結

12 「すずしめの鈴をならして、縣巫女来れり。（中略）『あれも品こそ替れ、のぞめば遊女のごとくなれるもの也。』（中略）『神のお留守、きく人もなきぞ』と、さまざまくどきて、それより常陸の国鹿島に伴ひ行て、其身も神職となって、国々所々に廻る。」（テキスト pp.104-105.）

13 「物の淋しきあしたは御蔵の籾挽とて、やとはるる女の有ぞかし。是は人のつかひ下主、隙の時はつかはしける。（中略）鼈甲のさし櫛、花の露といふ物もしりて、すこし匂ひをさす事、親方も見ゆるすぞかし。一日三十六文の定め、是さへとりてもどれば也。」（テキスト p.106）

14 「追分といふ所に、遊女と名付て、色のあさ黒きをみがき、木賊かる山家者を胼胝（ひびあかぎれ）をなおさせ、さき織（古着をリサイクルした服）の肌馴れしを木曽の麻衣（信濃の名産）に着替させ、」（テキスト p.113.）

果、 敢えて世之介を 4 巻まで旅行させる西鶴の意図が次のように理解出来た。

第一に、世之介の旅行を通じて大都市以外の地方の劣悪な経済状況が浮かび上がった。旅行を通じて出会った多くの男女は売春に走しり、大都市とは対照的な地方の現実のあり様が立体的に浮かび上がったと見受けられた。第二に、地方の風景や風習の描写により、作中に多様な生業の紹介ができた。さらには、表立った生業とは関係なく、性愛を利用しつつ生計を立てていた地方の人々の姿を如実に映し出すことが出来た。このように、『好色一代男』に旅行を設定することにより、大都市と対比される地方の人々と現実を反映することができたのである。したがって、『好色一代男』に描かれた旅行は、世間知らずなお坊ちゃまの世之介が地方の現実をも直視できる手段であり、これにより世之介が成長しつつあること否めない。世之介の旅行を通しての性愛の経験は、単にその行為に没頭したというよりは、関連する地方の劣悪な経済状況直視と多様な生業の理解を可能にさせ、さらには表立った生業とは関係なく性愛を利用する人々の現実に触れさせるものであった。しかし、果たして世之介は地方にての多くの性愛の経験に満足し、良い思い出として振り返ったろうか。『好色一代男』における旅行と性愛の経験は、多くの場合、粋とはかけ離れた野暮ったく荒いものであり、一回性のものであった。したがって、『好色一代男』の旅行は、京や大坂の大都市と対比される地方の鄙の文化、さらには生々しい地方の現実を映し出しつつ、世之介という人物が成長するに不可欠な多様な人間群像に接する装置であったと言える。

「かわいい子には旅をさせよ」ということわざのように、『好色一代男』に描かれた旅行は、世之介を成長させた。彼にとって旅行は単に娯楽と余暇のために試みた一連の営みであったという意義を超え、大都市の粋や優雅とは対照的な地方の生々しい現実を経験させる装置であった。したがって、『好色一代男』にての旅行は、近

臺大學術期刊資料庫

世社会を粋と野暮、都と鄙の対照的でかつ立体的な空間に描き出し得たところに、その意義があると考えられる。

【参考文献】

浅野晃（1995）「初期西鶴の世界―逃亡・放浪の構想と転変たる運命の主題」『西鶴への招待』、東京、岩波書店、p.72、p.83.

麻生磯次・冨士昭雄訳注釈（1974）『対訳西鶴全集一　好色一代男』、東京、明治書院、pp.27-145.

白倉一由（1994）『西鶴文芸の研究』、東京、明治書院、pp.18-20.

西島孜哉（1989）『西鶴と浮世草子』、東京、pp.20-21.

檜谷昭彦（2000）「名所記・評判記と浮世草子―好色旅日記をめぐって―」『浮世草子研究資料叢書第五巻　研究編 1　雑誌論文・講座論文』、東京、株式会社クレス出版、pp.304-305、p.311.

朴ジンハン（2006）「江戸時代上層農民の余暇と旅行」『歴史学報』第 189 輯、ソウル、歴史学会、p.237.

笛吹明生（2009）『江戸とんでも法律集』、東京、中央公論新社、pp.194-196.

森田雅也（2006）『西鶴浮世草子の展開』、大阪、和泉書院、p.58.

臺大學術期刊資料庫